

中国における日本語研究の歴史

徐 一平

1、はじめに

中国は世界において一番早く日本語を記録した国である。これは誰でも認められる事実であろう。中国の歴史書には、日本民族や日本語に関する記録は数多く見られる。しかし、日本語の研究、特に科学的な日本語研究になると、西洋に遅れてしまった。にもかかわらず、近代以後、特に新中国が成立してから、または中日国交回復以来、日本語学習のブームにともない、日本語研究の進歩にもかなり著しいものがある。中国の日本語教育の発展を促し、中国の日本語研究のレベルを高めるために、中国における日本語認識及び日本語研究の歴史を、全面的に且つ系統的に総括する必要があると思われる。もちろん、このような総括あるいは反省は、一つ膨大なプロジェクトになるが、筆者は現在考えていることをご報告し、学界同仁の皆様のご協力をいただき、力を合わせてこのプロジェクトを完成していきたいと思う。

2、中国人の日本語認識

中国の24史の一つである、早くも三世紀西晋の時代に陳寿によって編述された『三国志』には既に日本人に関する記録があった。『三国志』の「魏志」に「倭人」という部分がある（俗称「魏志・倭人伝」）。この部分は全体約2000字ほどの記述であるが、その後出された『後漢書』『倭伝』、『宋書』『倭國伝』などと共に、日本古代史の研究にとっても極めて重要な史料である。

倭人は帶方の東南大海の中に在り、山島に依りて国邑を為す。旧は百余国、漢の時に朝見する者有り。今使訳通ずる所三十国なり。郡從り倭に至るには、海岸に循いて水行し、韓國を歷て、乍ち南し乍ち東す。其の北岸の狗邪韓國に到るには七千余里なり。始めて一海を度ること千余里にして對馬國に至る。其の大官を卑狗と曰い、副を卑奴母離と曰う。居る所は絶島にして方四百余里可り。土地は山陥にして深林多く、道路は禽鹿の徑の如し。千余戸有るも良田無く、海物を食いて自活し、船に乗りて南北に市糴す。又南に一海を渡ること千余里、名づけて瀚海と曰う、一支國に至る。官を亦卑狗と曰い、副を卑奴母離と曰う。方三百里可り。竹木・叢林多く、三千許りの家有り。差田地有り、田を耕すも猶食うに足らず、亦南北に市糴す。又一海を渡ること千余里にして末盧國に至る。四千余戸有り、山海に浜いて居る。草木茂盛し行くに前人を見ず。好く魚鰐を捕え、水の深浅と無く皆沈没してこれを取る。東南に陸行すること五百里にして伊都國に到る。官を爾支と曰い、副を泄謨觚・柄渠觚と曰う。万余戸有り。世王有るも皆女王國に統属す。郡使の往来に常に駐まる所なり。東南して奴國に至るには百里。官を兜馬觚と曰い、副を卑奴母離と曰う。二万余戸有り。東行して不彌國に至るには百里。官を多模と曰い、副を卑奴母離と曰う。千余家有り。南して投馬國に至るには水行二十日。官と彌彌と曰い、副を彌彌那利と曰う。五万余戸可り。南して邪馬台國、女王の都する所に至るには、水行十日・陸行一月。官に伊支馬有り、次を彌馬昇と曰い、次を彌馬獲支と曰い、次を奴佳提と曰う。七万余戸可りなり。女王國自り以北は、其の戸数・道里略載を得べきも、其の余の旁国は遠絶にして詳を得べからず。……

以上のように記述をされている「魏志倭人伝」は、当時の倭人が生活していた場所、すなわち日本という国の具体的な位置を詳しく描写し、特にその中に出でくる「邪馬台国」と「女王」の部分に関しては、かつて歴史研究界ではいわゆる邪馬台国論争を引き起こし、日本古代史の研究にとってきわめて重要で且つ貴重な資料である。それだけで

はなく、この記述の中で、ところどころに触れられている語句、言葉は、また原始日本語の謎を解くに不可欠な史料としても注目されているのである。およそ2000字ばかりのこの「倭人伝」に見られる日本語の語句として考えられるものとしては、「卑狗」「卑奴母離」「爾支」「泄謨觚」「柄渠觚」「兜馬觚」「多模」「彌彌」「彌彌那利」「伊支馬」「彌馬昇」「彌馬獲支」「奴佳提」など官名10数語、「対馬」「一支」「末盧」「伊都」「奴」「不彌」「投馬」「邪馬台」「斯馬」「己百支」「狗奴」などの国名20数語、「卑彌呼」「難昇米」「(都市)牛利」「伊声耆」「掖邪狗」「卑彌弓呼」「(倭)載斯烏越」「台与」などの人名数語がある。これらの語句は、恐らく当時の日本語の中に使われていた官名、地名、人名などの固有名詞、つまり翻訳不可能な言葉の発音に基づいて、近似的な漢字音で真似されたものだと考えられる。もちろん、これらの近似音は様々な原因で必ずしも本来の発音に合致しない部分があり、特にいわゆる「中華思想」の影響で、選ばれた近似音の漢字は、ややもすると「卑」「狗」「馬」「奴」など意味的に卑しい漢字が多いのも更にそのそれを大きくしているかもしれない。それにもかかわらず、これらの記述はやはり世界的に最も早く日本語の発音や語彙について記述したものであり、しかも外国人の手による記述であるので、やはりすばらしい奇跡だといわなければならぬだろう。そして、もっと注目すべきことは、後の奈良時代に日本人が漢字を導入して文字を使う時代になってから、日本人が「万葉仮名」という漢字の使い方を発明したのだが、その中に使われている漢字の多くが既に「倭人伝」に使われていること、例えば「卑、奴、母、離、爾、支、謨、渠、彌、馬、那、利」など、これはもう一つの角度から、『三国志』『倭人伝』の中の日本語語音についての記述はやはりかなり客観性が高いと物語っているのであろう。

更に、もう一つ大事な事実が「倭人伝」から看取されることをここで特に強調したい。つまり「倭人伝」を注意深く読んで行くと、以下のような記述も見られる。

……下戸、大人と道路に相逢えば逡巡して草に入り、辞を伝え事を説くには、或は蹲り或は跪き、両手は地に拋り、これが恭敬を為す。対応の声を噫と曰う。比するに然諾の如し。……

これを読んだとき、恐らくすぐさまに、日本人が人の話しに対応するときに、いつも声に出している「はい」とか「へい」とかの応答の言葉が連想されるであろう。もっと面白いことに、日本語方言学者の研究によれば、各方言の応答の言葉には、「ナイ類」「ハイ類」「イー類」「エー類」「ヘー類」など11種類も観察されるが、その中で、「イー類」の分布が西日本かあるいは最も周辺（つまり歴史層としては最も古い層）に分布されていることが報告されていることと関連して考えれば、この「倭人伝」のこの部分の記述はもっと貴重なものであるかもしれない。こうして見れば、「倭人伝」に記述されている日本語は、すでに固有名詞の領域を越え、応答の言葉も含まれていて、当時の中国人が日本についての觀察がいかに細かいかと感心せざるを得ないだろう。

そして、『三国志』を始めとして、以後の中国歴代王朝の歴史書には、いずれも日本に関する記録が見られ、表1が示すように、『後漢書』から『清史稿』に至るまで、全部で14部の歴史書に、「倭人」「倭国」あるいは「日本」に関する記述があり、中国人が一衣帶水の隣邦である日本については、常に関心を示していたことを物語っているのであろう。

表1

書名	作者	編述された年代	伝・志の名前	日本の呼称
三国志	陳 寿	晋太康 10年 (289年)	東夷伝	倭人
後漢書	範 瞽	宋元嘉 22年 (445年)	東夷伝	倭
宋 書	沈 約	齊永明 6年 (488年)	東蛮列伝	倭国
南齊 書	肖 子顥	梁天監 13年 (514年)	東南夷伝	倭国
梁 書	姚思廉等	唐貞觀 9年 (635年)	東夷伝	倭
隋 書	魏徵 等	唐貞觀 10年 (636年)	東夷伝	倭国
晋 書	房玄齡等	唐貞觀 20年 (646年)	四夷列伝	倭人
南 史	李 延寿	唐顯慶 4年 (659年)	夷貊伝	倭国
北 史	李 延寿	唐顯慶 4年 (659年)	四夷伝	倭
旧唐書	劉 晰	後晋開運2年 (945年)	東夷伝	倭国・日本
新唐書	歐陽修等	宋嘉祐 6年 (1061年)	東夷伝	日本
宋 史	脱脱 等	元至正 5年 (1345年)	外国伝	日本
明 史	張廷玉等	清乾隆 4年 (1739年)	外国列伝	日本
新元史	柯劭 焱	民国 9年 (1920年)	外国伝	日本
清史稿	趙爾巽等	民国 16年 (1927年)	邦交志	日本

ただし、残念なことに、中国歴史書にある記述には、前の時代の記述をそのまま鵜呑みの形で踏襲することがあり、特に邊鄙なところや外国に関する部分がその傾向がもっと強く、日本に関する記述もその例外ではなかった。特に、日本が後に漢字を導入し、文字で表す手段が取られてから、中国との交流の中で、多く漢字や漢文が使われ、『三国志』にあるような、日本の固有名詞や言葉について、近似音をもって記述するものは、以後の歴史書にはほとんど見られなくなってしまった。

明代の時に、「倭寇」が問題となり、倭の状況を述べる書籍や記録が時運に乗じて多く現れ、その中に日本語の単語や文字が収録されているものも多く、多いものには3400余条にも達していると言う。しかし、それらのものはやはり単語レベルに留まり、日本語の構造や文法に関する記述、あるいは科学的な分析には至っていないのである。

3. 西洋人の日本語認識

中国人の日本語認識に対して、西洋人のほうは如何だろうか。その比較を通して、中国人の日本語認識の意味とその相違を見出すことができると思う。

早くも15世紀の末ころ、コロンブス大航海の時代に、西洋の人が既に遙か東に存在している島国—日本を発見したのであろう。しかし、本格的で、全面的に日本を認識するのは、恐らく16世紀の後半から17世紀の前半にかけて、キリスト教団（主としてイエズス会）の宣教師が日本にやってきて、宣教活動を始めてからのことだと思われる。

紀元1549年、イエズス会の創始者の一人でもあるザビエル（1506—1552、スペイン出身の宣教師）が初めて鹿児島から、日本の土を踏み、宣教活動を始めた。それ以来、イエズス会はどんどん日本に宣教師を派遣し、更に日本を通して中国にも宣教師が派遣され、ファーストイーストでの宣教活動を進めたのである。

言うまでもなく、宣教師たちの目的は宣教活動を通して、キリスト教の教義を普及することにある。しかし、布教活動に最も必要とされる手段は、ほかでもなく、まさに言語が一番大事である。言語を使って教義を説明する必要もあれば、言語を通して、相手の考え方を理解し、その疑問に対しても言語をもって答えてあげなければならない。このようにして、宣教師たちがすぐに日本の言葉に対して興味を示し、既に確立された西洋言語の文法体系をもって、日本語を分析し、それを解釈しようとしたのも、いわば当然のことであろう。

17世紀初頭、つまり1604年から1608年の間に、ポルトガル人の宣教師ロドリゲス（1561—1634、ポルトガル出身の宣教師、1577年から日本で宣教活動を始める）によって書かれた『日本大文典』が刊行された。この『文典』は、当時の標準的口語（すなわち京都地方の話し言葉）を中心に、文語をも関連させて、まず品詞論的に扱い、次に統辞論をも述べている。また、発音や日本語のローマ字表記法、方言などにも触れたほか、書状その他の文体的相違にも注意し、人名や数詞など様々な言い方まで、つまり外来の宣教師たちが日本語習得に必要な項目のすべてにわたっている。しかも、ほとんどの項目に日常の用語や文献的用例を豊富に上げて、具体的且つ実証的に詳述している。文法体系では、基本的にラテン文典の組織に倣っているのだが、それへの追随を超えて、「テニハ」を説き、日本語の形容詞が西洋言語のそれと違っていてむしろ動詞の性質に近く、直接述語になれるということから動詞の一種と断するなど、日本語の本質を捉え得た点が少なくない。これらの指摘は、当時として画期的な意味を持つものだと言わざるを得ない。

この文典の刊行とほぼ時を同じくして、イエズス会の宣教師数名の共編による『日葡辞書』も1603年から1604年までの間日本の長崎で出版された。この辞書は当時の口語を中心に文書語・詩歌語・女房詞・方言・卑語などを含む約32800語を収め、日本語をローマ字綴りのアルファベット順に配列し、ポルトガル語で意味用法を注釈している。そのほか、同義語・反対語・関連語なども挙げ、諸文典から大量の文例を示して使用者の理解に便している。この辞書が取っている形式にしろ、内容にしろ、いずれも近代的な体裁を備え、当時の日本語辞書としては、その右に出るものは恐らく無いだろう。

それ以後、少し遅れて日本に進出したドミニコ会のものとしてはコリヤード（?—1638、スペイン出身の宣教師、1619年日本に来て宣教活動をしたが、1622年ローマに戻った）が著した『日本文典』も刊行され、それから宣教師の手によるローマ字表記の『イソップ物語』『平家物語』なども世に出されている。

では、西洋からやってきたこの宣教師たちは、どうしてこのように日本語を科学的に認識し、記録、分析できたの

だろうか。実は、これもそれほど不思議なことではないようだ。16世紀のころには、ヨーロッパで偉大なるルネサンスが既に完成し、いろんな分野では既に東洋より遙かに進んでいる。東洋に派遣されたこれらの宣教師の中には、既に多くの進んだ科学技術を身につけている人が少なくない。彼らは、東洋で宣教活動をする一方、意識的にあるいは無意識的に西洋の先進的な文明の成果、例えば透視法や地動説など、を東洋に伝えてしまうことにもなる。特にこのような人材を選抜するときには、往々にして優秀な人が選ばれており、そのような人は当然のことながら、東西文明の交流に大きな役割を果たしたに違いない（もちろん、一部の宣教師が東洋の民族や文化を軽蔑し、宣教活動の中で、東洋の民族を侮辱したり、ひどい者には文化的ナスパイ活動まで働き、非常にマイナスな影響を及ぼしたもの否定できない事実である）。筆者はかつて東京大学名誉教授の平川祐弘氏が著述した『マッテオ・リッチ伝』を中国訳にしたことがある（1999年、光明日報出版社出版）。そこで、平川氏がマッテオ・リッチの天才的な言語センスや中国と西洋の文化的交流の中で彼が果たした役割に対する評価など、また一つの側面からこの問題を物語っているのであろう。

……ある日文官たちに招かれた際に、彼らにたくさんの漢字を書かせ、それを一読して記憶術を用いて最初ははじめから、次は逆から全部暗誦してみせました。……（1-P212）

……リッチがシナ語でうまく文章が書けるように勉強してきたのは、キリスト教の布教のためのカトリズムなどの漢文著述を志していたからで、友情についてのモラリスト的な観察を文章に書くためではなかった。リッチは、その種の著述を行えば、それが人間性にたいして興味をいただくシナの文官の注意を惹き、その結果自分がシナで名声を博し、信用も得られるであろうなどということは実はまったく予期していなかったのである。……（1-P233）

……だとすると、その西洋文明与中国文明との最初の出会いはどのようにして行われたのか、という経緯はおのずと興味を引かずにはおかしい問題点であろう。その出会いはもちろん、いろいろなレベルで、さまざまな形で、行われた。漢名を利瑪竇といいうイタリア人のキリスト教宣教師Matteo Ricci（1552-1610）に私が問題の焦点を絞ったのは、リッチが人類の歴史の上で、ルネサンス・ヨーロッパの学問上の諸知識も、中国の四書五経の学問も一身に備えた、最初の人だったからである。そしてその二つの文化の知識や知見を基にして、東アジアの人々に向けては漢文で著述し、西洋の人々に向けてはイタリア語で手紙や報告書を書いたからである。そのような多力者のリッチを、私はこの地球上に現れた最初の「世界人」uomo universaleとみなしている。……（3-250）

（平川祐弘『マッテオ・リッチ伝』より）

このように比較してみると、中国人は確かに世界で一番早く日本語を認識し、それを記録した民族であり、しかも後の時代でも常に日本の変化や発展にも注目していたのだが、しかし、科学的に日本語を認識する点においては、このときは既に西洋の人に遅れていたと認めざるを得ないだろう。

4. 清末における中国人の日本語認識

1868年、日本では明治維新が行われた。それ以後、日本は更に全般的に西洋の文明を取り入れ、「富国強兵」のスローガンのもとで、西洋の列強に仲間入りしようとしてきた。明治維新的勝利が世界を驚かし、清末にある中国にも強いショックを与えた。この中国と海を隔てて存在する日本は、決して「弾丸の小国」ではないと多くの人々が思うようになった。特に1894年に、中日の両国の間に日清戦争が勃発し、この戦争で負けてから、日本という国はますます中国にとって大きな存在となった。1897年、清朝政府から初めて正式に日本へ留学生を派遣し、日本に学び、同じように維新活動をしなければならないという風潮が中国で少しづつ強くなってきた。このようなブームの中で、日本語に注目した人も少なくなかった。

中国近代史上優れている人物、立派な外交家であり、思想家であり、文学者でもある黄遵憲（1848-1905）も、日本語に対して濃厚な興味を示していた。1877年から1882年まで、彼は初代日本駐在大使館の参事官として日本

に駐在していた。この間、彼は広く日本の友人と交流を深め、様々な文化活動を行っていた。そして、彼は日本の風土人情、社会状況、特に明治維新後に起きた日本社会や制度的な変化、またはその変化がもたらした影響などについても、細かく観察し、詳しく調べていた。彼が後に著述した『日本国志』という本には、日本の政治、経済、文化、教育、言語、天文、地理、歴史、伝統、風俗、人情などなど、およそ日本にかかるすべてのこと事が網羅されており、日本に関する『百科辞典』だと言っても決して過言ではなかろう。黄遵憲が、まず日本人が昔中国の先進的な文明を吸収するに際して、漢文を読むために発明された「漢文和読法」に注目し、この方法を使えば、ほとんどの漢文や漢籍が読めるし、しかも読んで分かるということに驚いていた。

凡漢文書籍、概副以和訓、于実字則注和名、于虛字則填和語。而漢文助詞之在発声、在転音者、則強使就我、顛倒其句説、以循環誦之。今刊行書籍、其行間仮字多者、皆訓詁語、少者皆助語。其旁注一二三及上中下、甲乙丙諸字者、如樂之有節、曲之有譜、則倒誦逆誦之次序也。

そして、日本語についても、次のように述べている。

日本之語言其音少、其語長而助詞多、其為語皆先物而後事、先實而後虛、此皆於漢文不相比附。

以上のように、短い叙述ではあるが、日本語のいくつかの特徴にも触れていると思われる。まず、日本語の音素が中国のそれより少ないということである。周知のように、日本語には母音が5個、子音が13個、半母音が2個、これらの音素が組み合わされて出来た日本語の基礎発音は約50個(いわゆる50音図)、更に濁音、半濁音、拗音などを入れても、全部で100個足らずの発音しかない。それに対して、中国語の発音は何百もある。また、中国語特に漢語では、基本的に文字を単位に言葉が出来ておらず、一字語の数が非常に多い。それに対して、日本語の中には单音節語是非常に少ない。例えば、中国語では「男」というところを、日本語では「おとこ」、中国語では「筍」というところを、日本語では、「たけのこ」と言わなければならない。いわゆる「込を先に、コトを後に」ということ、つまり目的語を先に出し、述語が後に回すこと、あるいは実的な詞が先に、虚の詞が後になるような文法構造にかかるということは、もっと顕著なことであろう。例えば、中国語では「吃飯了」という語順に対して、日本語のほうは「ご飯を食べました」となっていることなどはそのことを端的に示しているのであろう。

もう一人、康有為氏に従って「戊戌変法」に参加した政治家梁啓超（1873-1929）が、維新活動が失敗した後、日本に亡命し、日本で14年の亡命生活を送っていた。日本に着いたばかりの時、彼は日本語が分からず、日本人とは筆談で意志疎通を図っていた。しかし、相手が筆談で分からぬとき、あるいは筆や墨などを持ち合わせていないときは、非常に不便だった。そこで、梁啓超は日本語を習い始めたのである。でも、彼の日本語学習は、基本的には本を読むことを第一目的としたようである。日本人の漢文訓読のコツ「漢文和読法」に啓発されたせいか、梁啓超は、彼の同級生羅普と一緒に、日本語を「逆さまに読むこと」を中心にした「和文漢讀法」を考え出したのである。

凡学日本文法、其最浅而最要之第一着、当知其文法与中国相顛倒、実字必在上、虚字必在下。……知其一定之配列法、則每句之中、副詞第一、名詞第二、動詞第三、助動詞第四。

そして、梁啓超はこの「逆さまに読むこと」を秘訣とする方法を著書として編述し、『和文漢讀法』という本まで出版した。この本は、当時の日本に滞在する中国人が日本語を学習するときに利用する『速成教材』として使われ、この本の中で、彼はこの方法に基づいて勉強すれば、「学日文者數日小成、數月大成」し、「慧者一旬、魯者両月、無不可以呼一卷而味津津矣」だと言っていた。

もちろん、日本語の本や新聞を読み、しかも大体の意味をつかむことを目的としているこの「和文漢讀法」は、一時的な問題を解決し、あるいは短期間の中で、ある程度日本語が読めるようになるためには、それだけの積極的な意味があり、一定の効果もあることは否定できないだろう。しかし、このように勉強した日本語は、結局不完全なものであり、たとえ書かれた日本語がある程度理解できても、やはり自分の言葉になれず、あくまでもしゃべれない日本

語になってしまうのである。前節で触れた西洋宣教師たちの、話し言葉に注目し、あるいは方言までも理解でき、本当に普通の日本人ともコミュニケーションできるようなことと較べれば、非科学的なもので、あるいは立ち遅れている言語観と認めざるを得ないだろう。もっと重大なことは、梁啓超のような維新を目指す政治家でもこのように日本語を扱い、「和文漢読法」で日本語を勉強していたのだから、当然後世の人にも影響を及ぼしたのであろう。後の長い時代の中で、多くの中国人が日本語を「実詞前、虚詞後、顛倒読之、数日而小成、数月而大成」する漢文体系とみなしているのは、多からず少なからず、梁啓超がこの時期に提唱していた「和文漢読法」と何らかの因果関係があるだろうと思われてしかたがない。

5. 近代以後の中国における日本語研究

辛亥革命以後、当時日本に留学していた多くの人士や志士たちが帰国し、魯迅、郭沫若、郁達夫などを代表とする文学研究者による日本文学紹介の高まりが現れる一方、日本語研究と教育の面においても中国の歴史上初めての高まりが現れた。20世紀30年代、中国国内で出された日本語の研究と教育に関する翻訳書、著書、教材などは100余種もあり、言語総論、音韻、文法、語構成、用言、修辞、慣用句、翻訳など多方面に渡っている。この中で特に文法方面の著書が多く、全部で16種もあり、それには張廣中編著『速成日語法』、艾華編『日本語法例解』、張我軍著『現代日本語法大全』、金爽田編著『(新編) 日語法詳解』、汪大捷編著『(表解) 現代日文語法講義』、汪洪法編著『最新日本口語文法』、洪標編著『(英文法比較研究) 日本語精解』等々があり、当時の中国の日本語文法の研究がかなり実力に富んだものであることを示している。このほか、30年代には更に日本語研究と日本語学習を内容とする刊行誌もいくつか現れている。例えば、1934年1月に北平(現在の北京)の人々書店より創刊された月刊誌『日文与日語』と1937年2月に上海の中華日語月刊社によって刊行された月刊誌『中華日語月刊』とは、当時比較的に影響力を持っていた日本語の研究、学習の雑誌であった。しかし、20世紀30年代の後期になると、中日間に戦争が起り、この不幸な歴史から、中国の日本語研究は低調期に入ってしまったのである。

1949年、中華人民共和国が成立し、中国共産党の指導の下で、中国の各種事業も生き生きと発展するようになり、中国の日本語研究事業も同じように新たな発展期を迎えた。50年代頃、日本語研究者の努力により、その後の中国の日本語研究にとって相当長期にわたって影響を与えた優秀な研究成果が現れた。1958年と1959年に、時代出版社が前後して出版した陳信徳編著『現代日本語実用語法』上下二冊と、1959年に商務印書館が出した陳濤主編の『日漢辞典』は、70年代の末期に至るまで、中国の日本語研究者にとっては、権威的なものとしてその影響と作用を及ぼしつづけたのである。特に陳信徳氏の著書は、まさに後の者が「少しの誇張も含むことなしに言えることは、陳先生は新中国解放後の日本語文法研究の方面での権威であり、開拓者である」と評価しているように、日本の橋本文法と時枝文法、そして佐久間鼎、三尾砂、三上章などの学説を広範囲に吸収した基礎の上に、中国の学者に適した独自の体系を形成している。60年代に入ると、50年代の基礎の上に更なる新たな発展が見られた。1966年までに、日本語研究に関する著書は20余種出版されていたが、それには言語総論、文字、類義語の弁別と分析、構文論などが含まれている。その中で李統漢著『日語句子結構分析』が陳信徳の文法に継いで、新中国成立後、最初に文の構造から日本語の文法を研究した文法書として出版されたもので、その後の構造文法研究と構文論研究に良好な基礎を築いていたと言える。もし上述の基礎の上に順調な発展ができたのならば、中国の日本語研究事業は、必ずや早々に大きな飛躍があったであろうことは想像に難くないだろう。しかしながら、周知の通り、「文革」という歴史的な原因で、この良好な状況は保持発展させることができなかつたばかりか、中断させられてしまったのである。1966年から1973年にいたるまで、中国の大陸で、日本語研究に関する方面的書籍が一冊も出版されなかつたことは、この辺の事情を十分に物語ついているのであろう。

1972年中日国交が回復され、両国関係の正常化がまず中国人の日本語学習ブームを引き起こしたのである。1973年に、上海で上海市業余日本語ラジオ放送講座が開設され、その翌年から、上海に続いて北京人民放送局も日本語講座の放送を開始し、その後各地にも相次いでラジオ放送による日本語講座が開かれていた。このような日本語学習ブームの波に乗り、中国の日本語研究事業も回復を見た。1973年には商務印書館から北京市外国语学校日本語教研室編著の『現代日語基礎語法』が出版された。それは50年代に出された陳信徳の『現代日本語実用語法』のよ

うな独自の体系を持つものではなかったが、しかし日本語の文法書としては長期にわたる中断の後に現れた最初の比較的に整ったものであったことから、広範な日本語学習者にとってまさに待望の書として大いに歓迎されていた。1979年には黒龍江人民出版社から『現代日語語法手帳』が出版され、商務印書館からは李統漢の『日語句子結構分析』が重版された。特に言及しておきたいのは、1979年に北京对外貿易学院（現在の对外貿易大学）編集の『日本語の学習と研究』という雑誌が創刊されたことで、これは中国で最初の日本語研究と日本語教育とを旨とした全国的な専門誌であり、その出版と発行は、全国の日本語研究者に新たな研究成果発表と学術交流の場を提供したということになる。80年代以降、中国の日本語研究は第二時高潮期に入り、黄金期に入り始めたとも言えよう。社会において出版された各種の著述にも、日本語研究の各方面の新しい科学的な研究成果が反映されている。言語総論、音声指導、語彙、外来語、敬語、語構成、慣用句など日本語研究の各領域にわたる著書は何十種にのぼっている。この時期に穢り多かったものは、やはり文法研究の類に属する著述であった。各出版社から約30余種の文法専門書や翻訳書が出版されていたが、その中には現代日本語の文法を論述したものもあれば、もっぱら古代日本語の文法を論じたものもある。そして、年輩の日本語研究者が多年の精魂を込めた研究の成果もあれば、新中国成立後に中国が自ら養成して來た中堅、若手研究者の新作もあった。ことに日本語古典文法に関する専門書の出版は、中国の日本語研究が既に現代日本語から古代日本語に発展し、新たな飛躍を遂げていると物語っている。このほか文法の各専門事項の研究に関しても、この時期にはやはり新たな進展が見られた。例えば、テンス・アスペクト、助詞、文などの方面的著述が10数種も出版されている。これは中国の日本語研究が、更に深さと広さとを備え、多くの実力を持った日本語研究の専門家が一気に登場してきたことを示していると思われる。90年代になると、中国の日本語研究は、不斷に深化発展し、研究方法の開発であれ、研究をより深める点であれ、いずれも以前の時期に比べて更に新しい突破と進展が見られた。多くの研究論文と専門著書は、過去の簡単な紹介、あるいは一般的な帰納から、理論的な研究へと高まった。出版された著書などの内容から見ると、そこには日本語文法に対する総合的な研究もあれば、具体的な文法範疇についての深い探求もあり、また現代日本語の文法に対する新たな思考もあれば、古代日本語の文法ないし日本語の文法研究史についての明確な論述も見られている。

研究者の面から見れば、日本語研究の専門者が大いに成長してきた。特に80年代から、中国の教育部と日本の国際交流基金が協力して、「全国日本語教師培訓班」（日本語研究界では「大平学校」と親しまれている）を成立し、後にこの継続発展として創立された「北京日本学研究センター」とともに、中国の日本語研究と日本語教育事業のために多くの人材を養成した。この二つの機関で養成された人材はおよそ1300人ほど、中国における日本研究の各専門分野で活躍しているが、その中に日本語研究に従事している者は少なくない。中華日本学会と北京日本学研究センターが共同で調査を行い、それに基づいて編集された『中国における日本研究』（社会科学文献出版社出版）によれば、この調査のアンケートに回答された1260人の研究者の中では、日本語研究を専門としている研究者は463人で、全研究者の36.7%を占め、数の一番多い部分にある（ちなみにほかの研究者は、歴史、政治は250人で、19.8%、経済は218人で、17.3%、社会、文化は206人で、16.3%、文学は123人で、9.8%をそれぞれ占めている）。これらの研究者の研究成果が発表される雑誌や刊行物も豊富になり、同調査によれば、現在中国で、日本語研究の成果を常に載せている専門雑誌あるいは刊行物だけでも以下のようないわゆる「日本語研究」（对外貿易大学）、『日本語知識』（大連外国语学院）、『日本語教學』（上海外国语大学）、『科技日本語』（湖南大学）、『日本学』（北京大学日本研究センター）、『日本学刊』（中華日本学会、中国社会科学院日本研究所）、『日本学研究』（北京日本学研究センター）、『日本学研究論叢』（北京外国语大学）など。この他に、『外語教学与研究』（北京外国语大学）、『解放军外国语学院学報』（洛陽外国语学院）などのような外国语総合研究誌でもよく日本語研究の論文を載せるようになった。中国大学外国语専門誌研究会編集の『外語語言研究論文索引』（上海外語教育出版社出版）によれば、1985年から1989年までの間に発表された日本語研究の論文は746篇であったのに対して、1990年から1994年までの間に発表されたそれは、1449篇になったと言う。つまり、20世紀90年代に入ってからの5年間と過去の5年間と比べた場合、発表論文数は二倍になっているということになる。

6、終わりに

以上、中国人の古代から現代までの日本語認識と日本語研究に関する歴史を、非常に大まかに振り返ってみた。明確にしかも正確に過去の研究史を振り返り、はじめて今後の日本語研究事業が大いに前進するだろうと思っているからである。しかし、これはかなり膨大なプロジェクトで、とてもこのようなペーパーでまかなえるようなものではない。

嬉しいことに、近年来中国における日本語研究の成果はやはりすばらしい進展を遂げたことである。文中に触れたこと以外に、近年来、特に中日対照研究やコンピュータを利用した研究の成果には著しいものがある。例えば、コンピュータを利用して、大規模な中日対訳コーパスを構築されたことは、おそらく世界においても初めてのことであろう。

それから、もうひとつ断つておくべきことは、本稿で中国の日本語研究史を振り返ってみたのだが、それは大陸のものばかりで、本当の意味での中国の日本語研究史を総括するには、当然台湾や香港などの地域の日本語研究も含めて考えなければならない。周知のように、台湾の東吳大学、中央大学、中国文化大学などにも長い日本語研究の歴史を持っている。特に1997年、香港が大陸に返還されてから、香港の日本語研究者と内陸の研究者たちの交流は一段と盛んになった。2000年11月、香港の中文大学で国際シンポジウムが行われたときに、内地から多くの研究者が参加し、香港の研究者も積極的に内地の研究者との学術交流を図っていた。

それから、近年来海外で活躍されている中国人の成果も無視できないものになっている。例えば、彭飛『「ちょっと」はちょっと』(講談社)、『外国人を悩ませる日本人の言語習慣に関する研究』(和泉書院)、沈国威『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』(笠間書院)、劉学新『古代日本語の研究』(同成社)、徐敏民『戦前中国における日本語教育』(エムティ出版)、于康『日本語における不定語の構文的機能に関する歴史的研究』(渓水社)、張威『結果可能表現の研究』(くろしお出版)などがみなそうである。これら海外で発表された研究成果、あるいは海外で活躍されている「海外軍団」の中国人の日本語研究も、当然中国の日本語研究史の一環になってしかるべきであろう。

とにかく、過去の歴史を振り返ってみた場合、中国人には、世界で初めて日本語を認識し、それを記録した輝かしい一ページがある。そして、それ以来の長い歴史の中で、われわれには不斷に日本語に対して認識を深めてきた努力も見られている。特に30年ほど前、中日国交回復されてから、両国の友好関係はますます緊密なものになり、それに伴って、中国人の中の日本語学習者も急速に増え、今や世界の各国の中で三番目の地位を占めている。それに加わり、日本語研究と日本語教育に従事している者も千人以上にのぼっている。今後、中国の日本語研究者が日本あるいは世界の日本語研究者との交流を深め、一人一人の研究者、もちろん海外で努力している者も含めて、それぞれの力を合わせることによって、中国の日本語研究のレベルはきっと世界のレベルに達し、中国または日本、世界の日本語研究事業に大きく寄与するに違いないと、わたしは確信している。

引用文献

- 嚴安生 「黄遵憲の日本論」(1994年、北京外国语大学日語系『日本学研究論叢』第一輯)
- 国語学会編『国語史資料集—図録と解説—』(1976年、武藏野書院)
- 徐一平 『日本学基礎精選叢書、日本語言』(1999年、高等教育出版社)
- 石雲艶 「梁啟超与日本語」(2001年、『新世紀首届全国大学日語教学研究国際研討会』口頭発表)
- 中華日本学会、北京日本学研究センター『中国的日本研究』(1997年、社会科学文献出版社)
- 友定賢治 「日本語方言『立ち上げ詞』の構造と分布」
(2001年、大連外国语学院『第2回日本文化研究フォーラム』口頭発表)
- 平川祐弘 『利瑪竇傳』(劉岸偉、徐一平訳、1999年、光明日報出版社)
- 北京市中日文化交流史研究会『黄遵憲与近代中日文化交流国際学術討論会、論文集』(2001年)
- 山崎馨 『古代語逍遙』(1988年、和泉選書)